【殿ヶ谷の山車】

町指定有形民俗文化財（平成１８年７月６日指定）

棟　　高	４．８０メートル
台　輪　幅	２．４３メートル
台　輪　奥　行	３．３８メートル
一本柱の長さ	５．７０メートル
高　欄　直　径	１．５４メートル

殿ケ谷の山車は、今から１４０年程前の安政年間に建造されたと伝えられており、その囃子舞台で演じられる重松流祭囃子とともに、地区の祭礼における象徴的な存在として、受け継がれています。

この山車が文化財として重要な点は、江戸後期から明治期にかけて多摩、神奈川地域一帯で全盛をきわめた人形山車の特徴である、一本柱を立てる構造が遺されていることです。

山車の製作には、江戸後期から明治前期にかけて周辺地域で活躍した入間川村の甲田了作源高寿があたり、山車正面に施されている迫力ある「三匹竜」の作品や、柱に見られる絵様刳型の装飾など江戸後期の社寺建築の形式と技術が駆使されていて、建造されたこの時代の遺構をよくとどめています。また、囃子舞台の天井絵もこの山車の特徴です。

【石畑の山車】

町指定有形民俗文化財（平成１８年７月６日指定）

棟　　高	４．４０メートル
台　輪　幅	２．５０メートル
台　輪　奥　行	３．３０メートル
一本柱の長さ	４．５５メートル
高　欄　直　径	１．９０メートル

石畑の山車は、今から１３０年程前の明治初期に、地元石畑の大工吉岡助右衛門が、御嶽神社のケヤキを使用して建造したと伝えられています。その囃子舞台で演じられる町指定技芸の石畑重松囃子と共に地区の祭礼において象徴的な存在として受け継がれています。

この山車が文化財として重要な点は、江戸後期から明治期にかけて多摩、神奈川地域一帯で全盛をきわめた人形山車の特徴である、一本柱を立てる構造が遺されていることです。

石畑の山車は、後部楽屋の左右にある「二十四孝」を意匠した鏡板彫刻や、囃子舞台上部側面にある桁が湾曲しているなど、製作者独自の設計思想が表れていて、多摩及び周辺地域ではほとんど類例のない特徴を備えています。